

# 山城の庄内式甕をめぐる二、三の問題

高野陽子

## 1. 庄内式甕の地域形式

庄内式甕の系統的研究は、古墳出現期の地域間関係を探る上で重要な研究課題である。細筋のタタキ工具による成形と、内面ケズリによる調整によって器壁を薄く仕上げる庄内式甕には、これまで二つの系統が知られてきた。右上がりの細筋のタタキを主な特徴とし、頸部屈曲点まで内面ケズリを施す庄内河内形甕と、これに対してやや太筋の左上がり、あるいは平行のタタキを特徴とし、内面ケズリを頸部の下部でとどめる庄内大和形甕である。山城では、古墳時代初頭の集落遺跡から、これまで右上がりのタタキ痕をもつ庄内式甕が多量に出土している。これらの甕は地域形式に照らせば、タタキ手法から庄内河内形甕の系統に属することになり、在地で生産された河内形の模倣甕、あるいは変容甕として分類することになる。

こうした庄内式甕の二つの地域形式に対して、米田敏幸氏や奥田尚氏は、土器胎土分析の成果をもとに地域形式の再考の必要性を説き、新たな地域形式として「庄内播磨型甕」<sup>(注1)</sup>を提唱した。播磨は地質的に流紋岩質岩地域であり、播磨の庄内式甕の粘土の混和材は、基本的に流紋岩を起源とする砂粒構成をとる。奥田氏は、右上がりのタタキを施す山城の庄内式甕もまた、播磨と同様に「流紋岩組成」<sup>(注2)</sup>の胎土を基本としているとし、米田敏幸氏はこうした胎土分析の成果を受け、山城の庄内式甕は新たに提唱された「庄内播磨型甕」の範疇に属するとしている。

1990年代になされた庄内式甕の地域形式の再考を迫る問題提起に、山城の庄内式甕の問題は深く関わるが、その系統をめぐる問題は胎土分析から提起されたこともあり、ほとんど論議されること無く現在に至っている。山城の庄内式甕をどう捉えるか、胎土の問題を再考するとともに、その導入過程を素描し、問題点を整理することによって、古墳時代初頭における地域間の技術的な交流や山城における庄内式甕導入の背景について考えてみたい。

## 2. 庄内式甕 I b 類と胎土

庄内式甕について、小稿では、タタキ手法をもとに2系統に分け、さらに胎土によって

4つの類型を用いる。右上がりのタタキ痕をもつ庄内河内形甕の範疇に属するもので、「生駒西麓型」とされる角閃石の含有を特徴とする胎土をもつものを甕Ⅰa類とし、山城で特徴的に分布する、右上がりのタタキ痕をもちながらも、角閃石を含有しない砂粒構成をとるものを甕Ⅰb類とする。また、左上がりあるいは平行のタタキ痕をもつ庄内大和形甕を甕Ⅱ類とし、Ⅱ類についても、角閃石を含有するものをⅡa類、含有しないものをⅡb類として、以下、論を進めことにしたい。

まず、山城に特徴的に分布している庄内式甕Ⅰb類の胎土の問題についてみておきたい。甕Ⅰb類の胎土の問題がクローズアップされたのは、1985年の向日市鴨田遺跡の報告が契機となっている。<sup>(注3)</sup>鴨田遺跡で報告された庄内式甕の一群は、タタキ技法としては右上がりを基調とし、河内形の系統に属しながらも、胎土には角閃石を含まないものである。奥田氏はこれらの胎土分析を行い、その多くに流紋岩質岩およびそれに起源する砂粒、特に自形の石英が特徴的に含まれるとされた。流紋岩とは、斑状組織をもつ火山岩であり、岩石全体のケイ酸(SiO<sub>2</sub>)比率が70%以上とされる岩石である。ガラス質の石基と結晶部分の斑晶からなり、主な構成鉱物は、花崗岩と同様、石英、長石、黒雲母等を含む。斑晶には鉱物本来の形である自形の石英・長石などがみられることを特徴とする。<sup>(注4)</sup>山城盆地西部の乙訓地域の鴨田遺跡、あるいは桂川を隔て対岸にある久御山町佐山遺跡や八幡市内里八丁遺跡、同木津川河床遺跡など、山城盆地西南部の遺跡で多量の甕Ⅰb類が出土しているが、そのうち奥田氏が分析した鴨田遺跡や佐山遺跡、内里八丁遺跡では、任意に抽出して分析された甕Ⅰb類のほとんどが「流紋岩組成」とであるとされている。

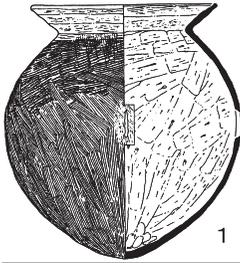
これらの遺跡のなかでも、久御山町佐山遺跡は、山城で最も多くの庄内式甕を出土した遺跡であり、図化しただけでも150点以上の庄内式甕を数える。甕の組成は、角閃石の含有を特徴とする河内形の甕Ⅰa類3.9%(6点)、大和形の甕Ⅱb類1.3%(2点)、角閃石を基本的に含まない甕Ⅰb類94.7%(144点)という組成である。<sup>(注5)</sup>甕Ⅰb類は右上がりの細筋のタタキ痕をもち、タタキ手法の系統からすれば、庄内河内形甕の範疇で捉えることができ、在地産の河内形模倣甕とすることも可能な土器群である。しかしながら、奥田氏の胎土分析によれば、分析が行われた破片は、そのほとんどが在地の砂粒構成ではない、流紋岩質岩あるいはその起源の砂礫が含まれているとされた。<sup>(注6)</sup>

佐山遺跡の土器胎土にみる基本的な砂礫構成を、地質的な位置によって確認しておきたい。佐山遺跡は、旧巨椋池(現干拓地)の南に位置する。南には木津川が流れ、北の旧巨椋池には宇治川の河川砂が流入する地形であり、佐山遺跡の周辺で得られる砂礫は、宇治川が運ぶ砂礫と木津川が運ぶ砂礫の2種から構成される。木津川は、花崗岩質岩の岩体を基盤とする丘陵から大量の砂礫を運び、宇治川は、宇治丘陵が粘板岩・頁岩を主体とする古

< I 系統 > (右上がり叩き手法)

甕 I a 類

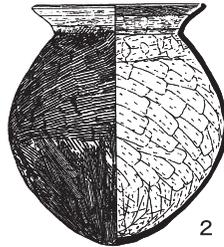
(a: 角閃石を含む)



1

甕 I b 類

(b: 角閃石を含まない)

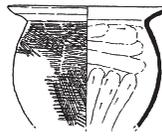


2

< II 系統 > (左上がり叩き手法)

甕 II a 類

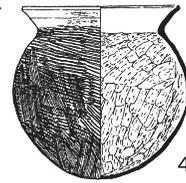
(a: 角閃石を含む)



3

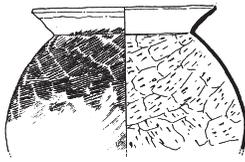
甕 II b 類

(b: 角閃石を含まない)

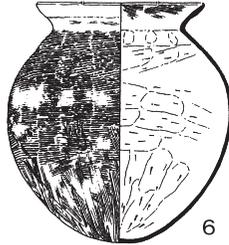


4

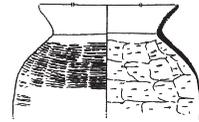
1~4. 八幡市内里八丁 20 次



5

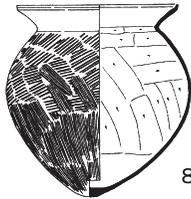


6



7

5~7. 久御山町佐山遺跡

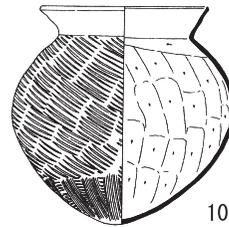


8

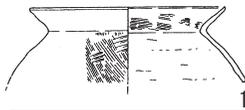


9

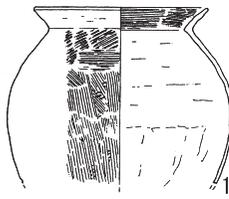
8~10. 京都市水垂遺跡



10

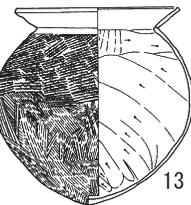


11

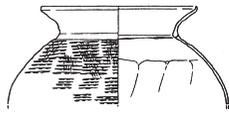


12

11・12. 向日市東土川西遺跡

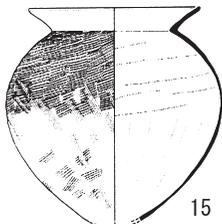


13



14

13・14. 向日市鴨田遺跡



15



16

15・16. 京都市中臣遺跡

第1図 山城の庄内式甕

生層を基盤とし、これに鮮新更新世の地層が重なるとされ、流域の砂礫は、花崗岩起源の石英・長石に加え、粘板岩・頁岩・砂岩・泥岩・チャートなどの古生層起源の堆積岩類や礫・砂が特徴的にみられる。市田齊当坊遺跡から佐山遺跡周辺の砂礫の堆積状況について、調査当時、同志社大学理学部の中川要之助氏による地質調査では、旧巨椋池側から小河川が幾つか南流した痕跡がみられるとされ、そうした小河川による砂礫の堆積が周辺の基盤で確認できるとされた。弥生時代中期最大規模の集落である市田齊当坊遺跡において、在地系土器にみられる胎土中の砂礫は、中期を通じて、石英・長石などの砂礫にチャートや頁岩、泥岩などの堆積岩類が含まれるものであり、こうした地質的な見解と齟齬はない。堆積岩類の含有を特徴とする胎土は、弥生時代後期後半の佐山遺跡の土器胎土でも大きく変わらないが、弥生時代後期末には煮沸具である甕を中心に、混和される砂礫が大きく変容する。在地産とみられる第5様式系甕の砂礫構成は後期末には大きく変わっており、花崗岩質岩の岩体を基盤とする丘陵から大量の砂礫を運ぶ木津川から採取した河川砂とみられる砂礫が主体となり、石英・長石・黒雲母等、花崗岩起源の砂礫のみで構成される土器が急激に増加する。混和させる砂礫を、意識的に選択したものと考えられる。

問題の流紋岩質岩は、地質的には山城南東部に部分的に分布するが、露頭など多量に採取できる地点は盆地内では確認されていない。流紋岩質岩やそれを起源とする砂礫が土器に特徴的に含まれるとすれば、流紋岩質岩を産する地域の土器が搬入されたか、あるいは流紋岩質岩起源の砂礫を得て、在地で粘土に混和し製作したものということになる。山城の庄内式甕は右上がりの細筋のタタキ痕をもち、口縁部の立ち上がり角度が高く外反状に立ち上がるという地域的な特色がみられるものが多く、佐山Ⅱ-4式(米田河内編年庄内式中期Ⅳ併行)<sup>(註7)</sup>の甕の組成の中心をなすものである。盆地西部から南西部の複数の遺跡において、甕の組成において主体的な位置を占めることや、出土総量の多さから判断しても、搬入品とみることはできず、在地で生産された庄内式甕と考えることが妥当である。奥田氏が指摘するように「流紋岩組成」であるならば、混和材として流紋岩質岩起源の砂礫を持ち込んだか、あるいは流紋岩質岩を岩体で持ち込み砕くなどして土器製作に用いたとみるべきであろう。<sup>(註9)</sup>いずれにしてもその採取地域が問題となるところである。

畿内周辺における流紋岩地帯は、湖東流紋岩として知られる近江南部地域であるが、近江系土器は受口状口縁という特徴的な口縁部形態をとるため、「く」字口縁の庄内式甕に影響を与えることは考えられない。流紋岩質岩の砂粒構成をとる地域は、奈良市北部周辺などにもみられるが、大和盆地における庄内式甕の生産は東南部に集中し、北部における分布はわずかとされ、奈良盆地北部からの影響を考えることも難しい。一方、播磨は、畿内周辺部において、地質的に近江南部とならぶ大規模な流紋岩地帯として知られる地域で

あるとともに、古墳時代初頭においては、姫路市播磨長越遺跡や同和久遺跡、太子町鶴遺跡など、庄内式甕を主体的に生産している地域としても知られ、山城における庄内式甕の生産に関して、その影響関係が十分に検証されるべき地域といえる。

### 3. 導入期と盛行期にみる土器様相

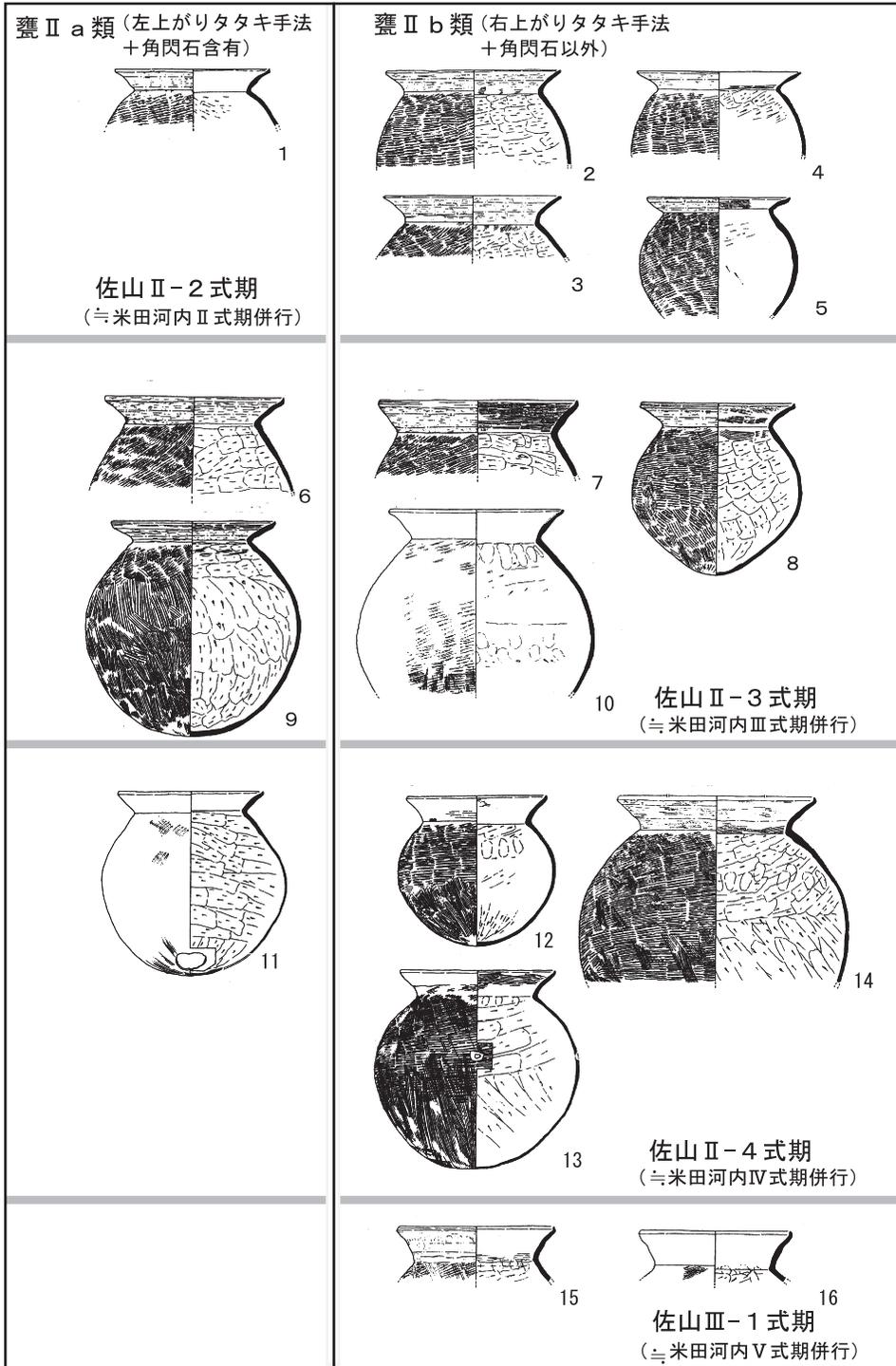
山城における庄内式甕の導入・分布の状況は、盆地の各所で異なる様相がみられる。山城南西部における弥生時代後期末の土器様相は、佐山遺跡のように、いわゆる畿内の弥生系甕である第5様式系甕が組成の中心を占め、そこには内面ケズリ技法は主体的にみられない。内面ケズリ技法は、庄内式中相における庄内式甕の属性として出現しており、弥生時代後期末の在り系甕から発展的に生成される要素はみられないことをまず確認しておきたい。

山城における庄内式甕の導入は、淀川上流部にあたる乙訓地域を中心とした西部と、旧巨椋池南部から八幡丘陵にかけての南西部において、甕Ⅰa類と甕Ⅰb類がほぼ同時期にみられる。また、盛行期には、山城南西部および西部では多量の甕Ⅰb類が出土する一方、山城北部では、甕Ⅰb類の出土例はわずかにとどまり、生駒西麓型の胎土をもつ甕Ⅰa類が組成の中心となっている。

まず、導入期の在り方を見ておきたい。山城南西部の状況は、時期によって大きく変化し、北西部とは様相を大きく異にする。庄内式甕の出現初期における状況は、乙訓地域の東土川西遺跡と旧巨椋池南部の佐山遺跡の例によって知ることができる。

向日市東土川西遺跡は、2003年に再整理報告が出されており、その旧流路S D3603出土土器は、かねてから森岡秀人氏が山城第Ⅴ-5様式に後続する庄内期前半の資料として位置付けていたもので、5点の庄内式甕が図化されている。田中元浩氏の再整理によって庄内式中相として報告されたもので、<sup>(註10)</sup> おおよそ佐山Ⅱ-2式段階に帰属する資料である。この資料には、高橋編年Ⅹ-b～c期に位置付けられる吉備系甕が出土している。<sup>(註12)</sup> 庄内式甕の組成は、生駒西麓産の胎土をなす河内形甕となる甕Ⅰa類4点が出土している。タキキ手法は河内形甕の系統にありながら胎土は生駒西麓産でない甕Ⅰb類は1点含まれるにすぎず、庄内式甕の導入初期において河内形甕が圧倒している状況が窺える。

一方、南西部の佐山遺跡では全く異なる状況がみられる。庄内式甕の出現は、東土川西遺跡とほぼ同様の時期の庄内式期前半の佐山Ⅱ-2式段階(米田編年庄内式期Ⅱ併行)にあるが、組成が大きく異なる。佐山遺跡S H217出土の庄内式甕は、山城盆地のなかでも東土川西遺跡と並ぶ最も早い段階のものだが、出土した甕5点のうち、甕Ⅰb類が4点を占め、生駒西麓産の甕Ⅰa類は1点に留まる。佐山遺跡S H217から出土した甕Ⅰb類は、



第2図 佐山遺跡にみる庄内式甕の変遷

いずれも盛行期の庄内式甕に特徴的な口縁端部の摘みあげをもたない単純口縁をなすものである。口縁部や体部中位までの破片であり、全体のシルエットを窺うことは難しいが、タタキ条線が3～5本/cmであり、1.5～2.5本/cmの第5様式系甕から一段と細線化が進み、頸部まで内面ケズリを施した薄手の甕として仕上げられた、いわゆる初期庄内式甕の範疇にある甕である<sup>(注13)</sup>。S H217から出土した甕I b類4点は、形式的に属性のまとまりがみられる一群であり、いずれも奥田氏の分析で「流紋岩組成」とされたものである。東土川西遺跡で、1点のみ出土した在地系庄内式甕とされた甕I b類と口縁部の形態など類似することから、導入初期の段階に、盆地南西部を中心に地域的な広がりを想定できる。

佐山遺跡や東土川西遺跡の初期庄内式甕の帰属時期は、佐山Ⅱ-2式期にあり、米田編年庄内Ⅱ式期におおよそ併行するとみられることから、八尾市東弓削遺跡S D-1で出土した庄内大和形甕と同様、播磨においてもその存否が問題となる時期の「流紋岩組成」の庄内式甕となる。近年、播磨の庄内式前後の土器編年を提示した田中元浩氏によれば、播磨における庄内式甕の出現は、田中編年庄内2(米田庄内Ⅱ式期新、寺沢庄内3式併行)<sup>(注14)</sup>にあるとされる。佐山遺跡で庄内式甕I b類が出現する佐山Ⅱ-2式期は、おおよそ米田編年庄内Ⅱ式、寺沢庄内2式に併行し、播磨における庄内式甕の出現が山城に先行するのかどうか、問題となるところである。米田氏は東弓削遺跡の資料から、庄内Ⅱ式期から播磨産の庄内式甕を「他地域へ搬出するシステム」が完成していた可能性がある<sup>(注15)</sup>と早くに示唆しており、畿内周辺部における庄内式甕の出現と播磨地域の関与をめぐるのはなお問題を残し、今後もその併行関係の検証が必要である。

次に、盛行期の様相をみておきたい。畿内における庄内式甕の盛行期である佐山Ⅱ-3～4式期においては、山城北部では、庄内併行期の大規模集落として、京都市山科区中臣遺跡をあげることができる。中臣遺跡は、京都市埋蔵文化財研究所よって、多年にわたって調査された遺跡であり、第67次調査などにおいて、角閃石を含む胎土をもつ甕I a類の出土例が一部報告されている。甕I b類がほとんど報告されていないことから、西南部の庄内式甕は、河内の搬入品を中心とするというおおよその傾向が想定できたが、2009年の第85次調査において、組成を知ることができる良好な一括資料が報告されている<sup>(注16)</sup>。中臣第85次調査の竪穴住居14は、庄内式甕と布留式甕が共伴する一括資料であり、庄内式甕がまとまって出土し、その構成比が推定できる。報告された庄内式甕は口縁部細片が多く含まれるため、その傾向を把握するにとどめたいが、図化された15点の庄内式甕のうち、大和型とされる甕Ⅱ類1点(甕I b類の可能性もある)を除いて、14点が生駒西麓産とされる角閃石を含む甕I a類であり、9割以上(約93%)を占める。

一方、淀川・宇治川・木津川の三河川が合流する山城南西部から西部の地域では、久御

山町佐山遺跡、八幡市内里八丁遺跡、向日市鴨田遺跡など、各遺跡から庄内式新相～布留式古相において、多量の甕 I b 類が出土している。盆地南西部の佐山遺跡では、前述したように佐山 II-2 式期(米田庄内式期 II 併行)に、甕 I b 類のなかでも初期庄内式甕が出土するが、いわゆる生駒西麓型の胎土をもつ庄内式甕 I a 類の搬入は 1 点に留まっている。甕 I a 類は、各期を通じ 6 点を数えるにすぎないが、その搬入時期は佐山 II-3 式に集中する点は注意されるべきである。佐山 II-3 式期は、在地生産が本格化する前段階であり、河内からの搬入品である甕 II 類の供給が組成を大きく補完していたものと考えられる。

庄内式甕の生産における画期は、遺跡規模が最も大きくなる佐山 II-4 式期(米田庄内式期 IV 併行)にあり、庄内式甕 I b 類が急激にその数を増し、出土量のピークを迎えることになる。この時期には、竪穴式住居 1 基に約 30～40 個体が出土する例もあり、甕 I b 類の総数は口縁部のみ破片等を含め、約 150 点以上におよぶ。これらの色調は全体に白っぽい胎土であり、淡灰褐色・淡黄灰褐色(あるいは標準土色帖の「にぶい黄」、「にぶい黄橙」)などを呈するものが多く、肉眼観察では石英・長石、そして灰色や淡褐色等の砂粒(一部は流紋岩とされた)等が確認できるものである。

庄内大和形甕となる甕 II 類は、佐山遺跡や内里八丁遺跡、水垂遺跡、大切遺跡で各 1 点が報告されているが、その割合は極めて低い。庄内大和形甕は、奥田尚氏の胎土分析によると、角閃石を含有する特徴をもつものと、流紋岩を含有する特徴をもつものがある。庄内式甕において、角閃石を含有するものは生駒西麓産とされがちであるが、大和東南部の寺川流域では、角閃石の含有が特徴的にみられ、弥生時代後期から続く在地の胎土と考えられている。山城盆地では、奥田氏によって大和東南部の寺川周辺からの搬入品とされた角閃石を含む甕 II a 類が内里八丁遺跡で 1 点が確認されるが、盆地内における大和形甕の分布そのものが極めて点的な在り方を示しており、山城の庄内式甕の生産に関して、大和からの影響はほとんど無いとみてよいだろう。

#### 4. 庄内式甕を生産する集落の地域関係

山城における庄内式甕の受容は、淀川水系の上流部にあたる山城西部から南西部の地域で最初に受容される。また、山城北部から北東部では、河内からの搬入品とみられる生駒西麓型胎土をもつ庄内河内形甕、すなわち甕 I a 類が卓越し、山城西南部ではタタキ手法は系統的に河内形の範疇にありながらも、生駒西麓型の胎土をもたない甕 I b 類が主体であることを示した。

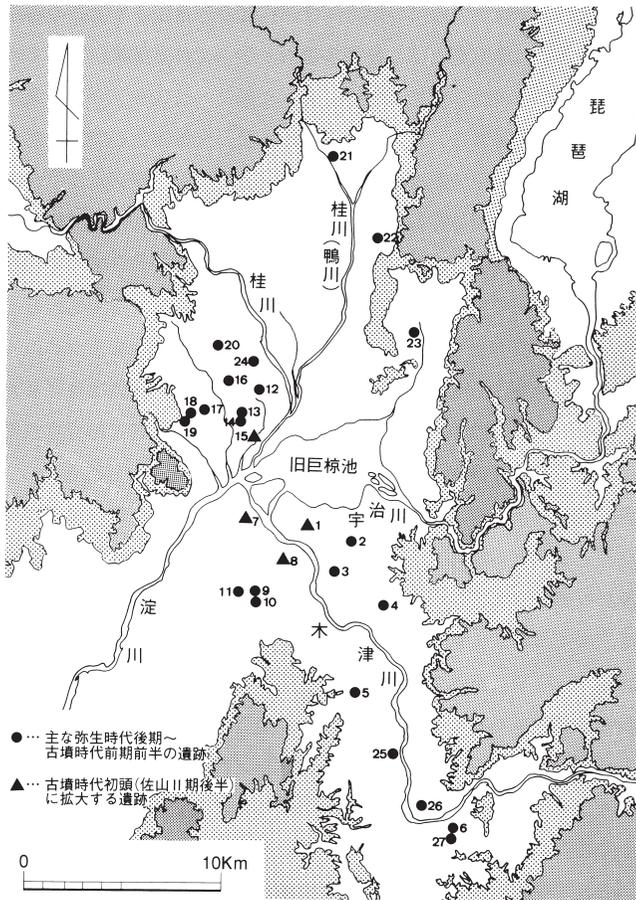
特にその地域色が明らかになるのは、佐山 II-4 式期(米田河内庄内 IV 式期併行)である。こうした事例を顕著に示すのは、前述した盆地北東部の甕 I a 類が卓越する中臣遺跡第 85

次堅穴住居14出土資料であり、初期布留式甕が共伴することから、甕Ⅱb類が多量に出土した佐山遺跡S H383とはほぼ同じ時期の佐山Ⅱ-4式期に併行すると推定される。佐山Ⅱ-4式期においては、山城の庄内式甕の分布は、河内からの搬入庄内式甕とみられる甕Ⅰa類を組成の中心とする山城北東部と、在地産の甕Ⅰb類(胎土では流紋岩組成とされる)が組成の中心となる山城南西部・西部に分かれ、盆地内での地域色が鮮明になることを指摘できる。

山城における古墳時代初頭の集落は、佐山遺跡や水垂遺跡、内里八丁遺跡、木津川河床遺跡など、盆地内でも標高が低い旧巨椋池周辺や木津川の旧流路周辺の低地部に新たに出ており、筆者は水上ルートを介した交易拠点としての性格を強めた集落であると考えている。<sup>(註17)</sup>これらの遺跡のうち、様相を異にするのは、外来系土器が多量に出土した水垂遺跡であり、出土した10点あまりの庄内式甕は甕Ⅱb類(庄内大和形甕)と甕Ⅰb類の可能性がある2点を除き、いずれも河内からの搬入品とみられる甕Ⅰa類で占められている。西部のなかでも最も低地に位置し、河川に形成された港に隣接したと考えられるこうした集落が、淀川水系において、河内と山城盆地北部域、さらには近江を介した東方との交易を担う交流拠点としての役割を果たしていたのだろう。

古墳出現期の拠点的な集落については、國下多美樹氏が、興味深い類型を提示している。國下氏は、弥生時代中期から断続的に続く集落と、古墳時代初頭に新たに営まれる集落に分け、前者を「弥生型集落」、後者を「庄内型集落」とし、「弥生型集落」は乙訓北部で遺跡群を構成し、「庄内型集落」は乙訓南部で形成され、集落拡大して各水系の下流域まで広がる<sup>(註18)</sup>としている。「庄内型集落」とされる向日市鴨田遺跡や、旧巨椋池周辺の低地部に分布する古墳時代初頭に新たに開発された、水系を利用した交易に適した立地をもつ集落において、甕Ⅰb類が大規模に生産されることになる。

山城で生産された庄内式甕Ⅰb類の多くは、奥田尚氏の胎土分析によって「流紋岩組成」とされ、播磨産と山城産の庄内式甕は流紋岩含有型であるという点で、生駒西麓産などの角閃石含有型の甕に対して一つのグループを形成することになる。前述したように、山城には流紋岩質岩の露頭が基本的にみられないことから、播磨などの流紋岩質岩の露頭から採取された砂礫かあるいは流紋岩そのものが搬入され、砕いて土器に混和したと考えざるを得ない。器壁の薄い庄内式甕には、土器混和材の選択は製作手法の根幹をなす部分であり、山城の庄内式甕の生産には、流紋岩地帯であり、庄内式甕の生産を行っていた播磨における土器製作の手法が深い関わりをもっていると推定される。<sup>(註19)</sup>流紋岩が混和材として用いられる理由については、地域的關係だけでなく、岩石の性質にもよると考えるが、この点については若干の私見を別稿に述べた。<sup>(註20)</sup>今後、器壁の薄壁化と混和材の關係につい



第3図 山城の弥生・古墳時代集落（弥生後期～古墳前期）  
（注5文献より）

- |            |            |            |           |
|------------|------------|------------|-----------|
| 1. 佐山遺跡    | 2. 若林遺跡    | 3. 塚本東遺跡   | 4. 森山遺跡   |
| 5. 田辺天神山遺跡 | 6. 燈籠寺遺跡   | 7. 木津川河床遺跡 |           |
| 8. 内里八丁遺跡  | 9. 西ノ口遺跡   | 10. 宮ノ背遺跡  | 11. 備前遺跡  |
| 12. 東土川西遺跡 | 13. 鴨田遺跡   | 14. 馬場遺跡   | 15. 水垂遺跡  |
| 16. 森本遺跡   | 17. 今里遺跡   | 18. 谷山遺跡   | 19. 長法寺遺跡 |
| 20. 中海道遺跡  | 21. 植物園北遺跡 | 22. 岡崎遺跡   |           |
| 23. 中臣遺跡   | 24. 大藪遺跡   | 25. 椋木遺跡   | 26. 上狛西遺跡 |
| 27. 木津城山遺跡 |            |            |           |

「弥生型集落」は、乙訓地域に限らず、盆地北東部の京都市中臣遺跡などにも適用できる類型であろう。近江・山城・河内を淀川水系によって結ぶ従来型の交易ルートとネットワークのもとに形成された「弥生型集落」は、古墳時代初頭に至ってもその地域的關係を維持

て、理科学的な成果も含め検討される必要がある。

山城は、弥生時代中期の鶏冠井遺跡で出土した銅鐸石製鋳型（和泉砂岩製）や神足遺跡の銅剣や鉄斧などにもるように、弥生時代を通じて、金属器に関わる情報を淀川ルートによって得ていたとみられる。土器の交流についても、秋山浩三氏がかつて明らかにしたように、<sup>(注21)</sup>角閃石を含有する河内産の弥生土器は、弥生時代に継続的にもたらされており、淀川水系を通じた密接な交流が行われたと考えられる。淀川水系は、高槻市古曾部・芝谷遺跡など、各所に湖南地域の胎土をもつ近江系土器が流入し、近江南部と山城を結ぶだけでなく、大阪湾沿岸地域と近江やその東方をむすぶ重要な交易ルートでもあった。國下多美樹氏が交易拠点に着目して乙訓地域で示した

したものとみられる。一方、当該期に出現する盆地南西部・西部の集落は、播磨・阿波など瀬戸内東部地域からの土器の搬入が多くみられ、その関係性を強めた集落として新たに成立するとみられる。これらの集落では、旧来の地域関係・交易ルートによらず、古墳時代初頭に急速に勢力を拡大する瀬戸内東部地域とのネットワークを背景に集落形成が行われたのであろう。山城における庄内式甕の生産は、こうして新たに開拓された地域的關係のもとにはじまり、拡大したものと考えることができる。

(たかの・ようこ＝当調査研究センター調査第2課調査員)

- 注1 米田敏幸「庄内播磨型甕の提唱－松下勝氏の訃報に接して－」(『庄内式土器研究』Ⅲ 庄内式土器研究会)1992
- 注2 奥田尚「大和型庄内甕の砂礫種構成とその移動」(『庄内式土器研究』Ⅲ 庄内式土器研究会)1992  
奥田尚「庄内甕の砂礫構成とその産地」(『庄内式土器研究』XⅠ 庄内式土器研究会)1996
- 注3 松崎俊郎・中塚良ほか『鴨田遺跡』(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第14集 向日市教育委員会)1985
- 注4 久城育夫、荒牧重雄、青木健一郎『日本の火成岩』岩波書店 1989
- 注5 高野陽子編『佐山遺跡』(『京都府遺跡調査報告書』第33集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2003
- 注6 奥田尚「佐山遺跡から出土した土器にみられる砂礫」(『京都府遺跡調査報告書』第33集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2003
- 注7 地質的には田辺丘陵から山崎にかけては大坂層群相当層が分布し、石清水八幡宮の山塊は丹波帯の中生層が分布するとされるが、現木津川の河川砂礫は、佐山遺跡南部の木津川上津谷付近、男山丘陵北の御幸橋付近で採取した結果、いずれも花崗岩起源の石英・長石・黒雲母等から構成される河川砂であり、堆積岩類をほとんど含んでいない。
- 注8 米田敏幸「中河内の庄内式と搬入土器について」(『考古学論集』第1集 考古学を学ぶ会)1985  
米田敏幸「土師器の編年1 近畿」(『古墳時代の研究土師器・須恵器』第6巻 雄山閣)1991
- 注9 中塚良氏((財)向日市埋蔵文化財センター)から、乙訓地域の縄文時代の遺跡の事例から、土器の混和材は、遠方で混和材に適する礫を採取して岩体で持ち運び、遺跡周辺で細砕し土器製作に用いたと想定できる事例があるとご教示を頂いた。記して感謝したい。
- 注10 森岡秀人「山城地域」(『弥生土器の様式と編年 近畿編』Ⅱ 木耳社)1989
- 注11 田中元浩「(2)東土川西遺跡出土土器の検討」(「9 長岡京跡左京第36次(7 AND I I 地区)～左京一条三坊八町、東土川西遺跡～発掘調査報告」『長岡京跡発掘調査研究所調査報告』長岡京跡発掘調査研究所・(財)向日市埋蔵文化財センター)2003

- 注12 高橋護「弥生時代終末期の土器編年」『研究報告』9 岡山県立博物館 1988
- 注13 青木勘時「大和における庄内甕の動向―特にその初現期から盛行期にかけての在り方について(前・後編)」(『みずほ』第13・15号 大和弥生文化の会)1994・1995
- 注14 寺沢薫「畿内古式土師器の編年と二、三の問題」(『矢部遺跡』奈良県橿原考古学研究所)1986
- 注15 米田敏幸「庄内河内型甕の生産と移動」(『庄内式土器研究』I 庄内式土器研究会)1991
- 注16 柏田有香「中臣遺跡85次調査」(『京都市内遺跡発掘調査報告書』平成21年度 京都市文化市民局) 2010
- 注17 高野陽子「弥生～古墳時代の集落変遷」(『佐山遺跡』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2003
- 注18 國下多美樹「乙訓における土器交流拠点」(『庄内式土器研究』X X 庄内式土器研究会)1999
- 注19 高野陽子「庄内式甕の出現」(『京都府埋蔵文化財情報』第92号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2004
- 注20 高野陽子「庄内式甕の地域形式と胎土」(『古墳出現期土器研究』第1号、古墳出現期土器研究会) 2010年11月刊行予定
- 注21 秋山浩三「河内からもち運ばれた土器―山城・乙訓出土の生駒山西麓産土器―」(『長岡京古文化論叢』中山修一先生古希記念事業会) 1986

補注) 2010年7月に京都府埋蔵文化財研究集会在開催され、縄文土器を素材に、胎土の問題をテーマにした材質的な研究が行われている。土器が搬入されたのか、混和材が搬入されたのか、また混和材を選択する意味や、混和材と収縮率の関係などについて多角的に検討されている。中塚良・矢野健一・河本純一・木村啓章・木立雅朗「縄文土器の材質的研究 ～自然資源利用と文化の動き～」『第17回京都府埋蔵文化財研究集会 京都府の縄文時代 ～遺跡・遺物はなぜ動くのか～』京都府埋蔵文化財研究会 2010年